

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

令和2年度（2020年度）発生予報第8号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和2年度（2020年度）病害虫発生予報第8号（11月予報）

I 気象予報：令和2年（2020年）10月22日福岡管区气象台発表（単位：％）

◎向こう1ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
九州北部全域 (含、山口県)	気温	20	30	50
	降水量	40	40	20
	日照時間	20	40	40

II 【今後、注意すべき病害虫】

1 発生の概要

作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
チャ	カンザワハダニ	並	並	少(-)	並(±)	気温高(+) 降水並～少(+)	茶研予察ほ 御船町 並 (±)
カン キツ	ミカンハダニ	並	少	並(±)	並(±)	気温高(+) 降水並～少(+)	果樹研予察ほ 宇城市 並 (±)
冬春 トマト	黄化葉巻病	並	やや多	黄化葉巻病 やや少 (-) コナジラミ 並(±)	並～やや少 (-)	(コナジラミ) 気温高(+)	
	すすかび病	やや少	やや少	少(-)	並(±)	気温高(+) 降水並～少 (-)	
冬春 ナス	すすかび病	並	並	並(±)	並(±)	気温高(+) 降水並～少 (-)	



作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
ウリ科 野菜	退緑黄化病	やや多	並	—	キュウリ 並 メロン やや 多～並 (+)	(コナジラミ) 気温高(+)	メロン特別調査 並(±)
イチゴ	うどんこ病	並	やや多	並(±)	やや多～並 (+)	降水並～少 (-)	
	ハダニ類	やや多	やや多	やや多(+)	並(±)	気温高(+)	
冬春 果菜類	コナジラミ類	やや多	並	トマト 並 ナス 並 (±)	キュウリ や や多 ナス 並～や や少 トマト 並 メロン やや 多～並 (±)	気温高(+)	メロン特別調査 並(±)
	アザミウマ類	並	並	ナス 少 (-)	キュウリ 並 ナス やや少 メロン やや 多～並 (±)	気温高(+)	
野菜類 全般	ハスモンヨトウ	やや多	やや多	イチゴ 並 トマト や や多 ナス 多 (+)	イチゴ やや 多 トマト 並 ナス 並 (+)	気温高(+)	フェロモントラップ 調査 阿蘇市一の宮 並 合志市 並 山都町 少 阿蘇市波野 少 八代市 並 (-)

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(-)は発生を抑制する要因、(±) は影響が少ない要因であることを示す。



2 予想発生量、根拠、対策等

◎チャ

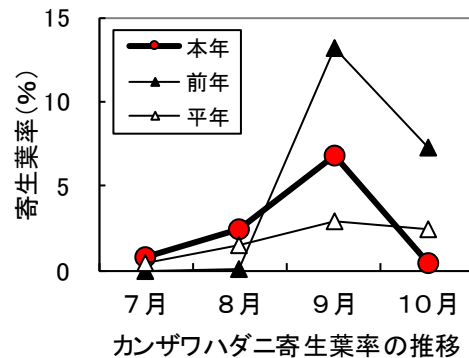
1) カンザワハダニ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 10月の巡回調査では、寄生葉率0.5%（平年2.4%）で、平年比少の発生であった（－）。

イ 茶業研究所（御船町）の10月第4半旬の調査では、寄生葉率2.0%（平年3.6%）で、平年並であった（±）。

(3) 対策 ア 越冬を始める11月上中旬に園地をよく観察し、発生が認められる場合は直ちに防除する。なお、赤焼病常発園ではダニ剤を、それ以外の園地ではマシン油乳剤を選択し、樹冠深層部やすそ部にもむらなく薬液が付着するよう規定の散布量で丁寧に散布する。



カンザワハダニ寄生葉率の推移

◎カンキツ

1) ミカンハダニ

(1) 発生量：並

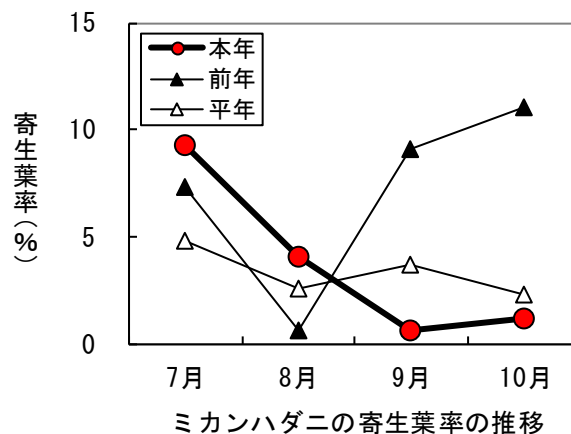
(2) 根拠 ア 10月の巡回調査では、雌成虫の寄生葉率1.2%（平年2.3%）、寄生頭数0.1頭/10葉（平年0.5頭/10葉）と平年並の発生であった（±）。

イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場調査では、10月第5半旬の寄生葉率は3.0%（平年2.1%）で平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 収穫時にミカンハダニが寄生している場合、収穫後に増殖し被害を及ぼすことがあるため、収穫期間近に発生が確認されたら薬剤防除を行う。特に、不知火等の収穫後貯蔵する品種では発生に注意する。

イ 収穫期間近に薬剤を散布する場合には、薬剤の使用時期に注意する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



ミカンハダニの寄生葉率の推移



◎冬春トマト

1) 黄化葉巻病

(1) 発生量：並

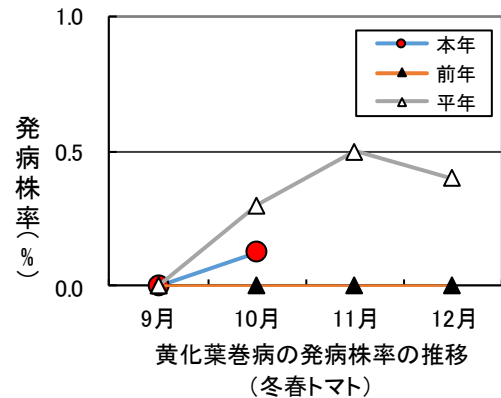
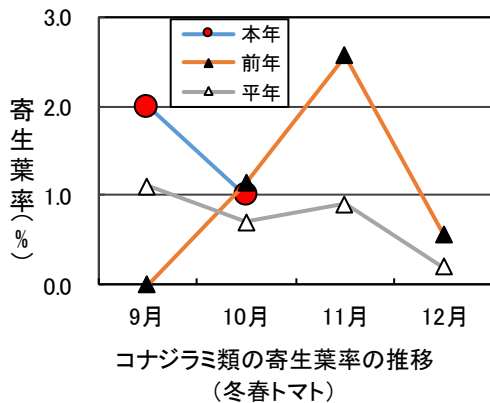
(2) 根拠 ア 10月の巡回調査では、発病株率は0.1%（平年0.3%）で平年比やや少であった（－）。

イ 10月の巡回調査では、冬春トマトのコナジラミ類の寄生葉率は1.0%（平年0.7%）で、平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア タバココナジラミを施設内に入れない対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照）。

イ 施設内外の雑草は、タバココナジラミの重要な増殖源となるので除去する。

ウ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、タバココナジラミの早期発見に努める。



2) すすかび病

(1) 発生量：やや少

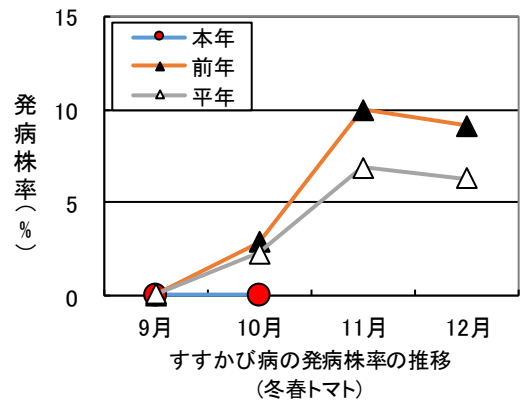
(2) 根拠 ア 10月の巡回調査では、発病を確認せず（発病株率平年2.3%）、平年比少の発生であった（－）。

(3) 対策 ア 過度のかん水を避けるとともに、保温や換気を十分に行い、施設内の過湿防止に努める。

イ 多発生すると防除が困難なため、発生初期に防除を徹底する。

ウ 発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎冬春ナス

1) すすかび病

(1) 発生量：並

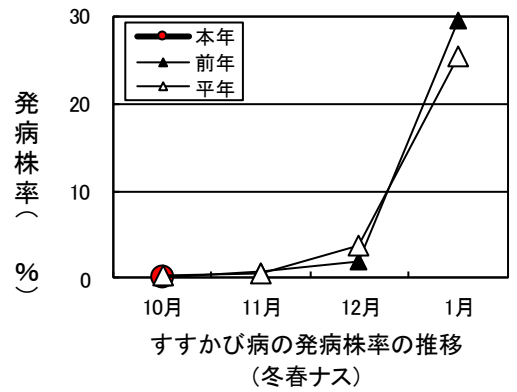
(2) 根拠 ア 10月の巡回調査では、発病を認めず（発病株率平年0.4%）、平年並であった（±）。

(3) 対策 ア 過度のかん水を避けるとともに、保温や換気を十分に行い、施設内の過湿防止に努める。

イ 多発生すると防除が困難なため、発生初期に防除を徹底する。

ウ 発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎ウリ科野菜

1) 退緑黄化病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 10月に実施したメロン現地ほ場の調査では、発病株率15.9%（平年16.7%）で平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア タバココナジラミを施設内に入れない対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照）。

イ タバココナジラミを施設内で「増やさない」対策を徹底する。現在栽培中のほ場では、タバココナジラミの防除を栽培終了まで継続して行う。

ウ 施設内の発病株や周辺の野良生えは、重要な伝染源となるので除去する。

◎イチゴ

1) うどんこ病

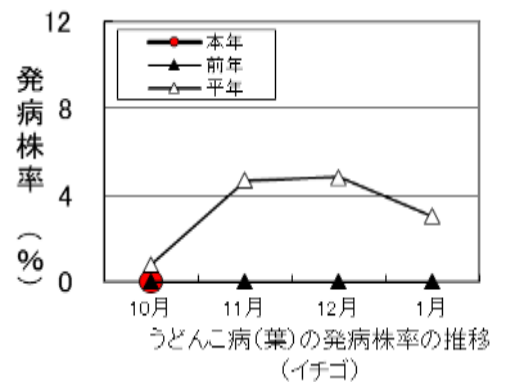
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 10月の巡回調査では、発病を認めず（発病株率平年0.8%）、平年並であった（±）。

(3) 対策 ア 開花期までの防除に重点を置く。

イ 薬剤防除では葉裏に十分かかるように散布する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) ハダニ類

(1) 発生量：やや多

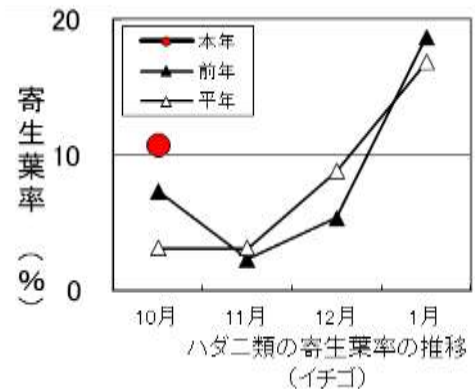
(2) 根拠 ア 10月の巡回調査では、一部多発ほ場が見られ、寄生葉率10.7%（平年3.1%）で平年比やや多であった（+）。

(3) 対策 ア ハダニ類は下葉の裏に多く寄生しているので、老化葉は積極的に除去する。除去した葉は、施設外に持ち出し適正に処分する。

イ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、発生初期に防除を徹底する。

ウ 収穫や管理作業の際に発生を確認した箇所には目印を付け、気門封鎖剤等で防除を行い、その後の発生を注視する。

エ 天敵（チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ）を放飼する場合は、天敵に影響の少ない農薬を使用する。ただし、ハダニ類が多発生した場合には、効果の高い殺ダニ剤を使用し、一旦確実に密度を下げ、その後は殺ダニ剤や気門封鎖剤を主体とした防除に切り替える。



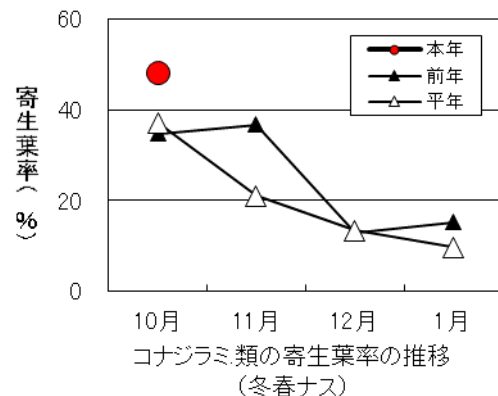
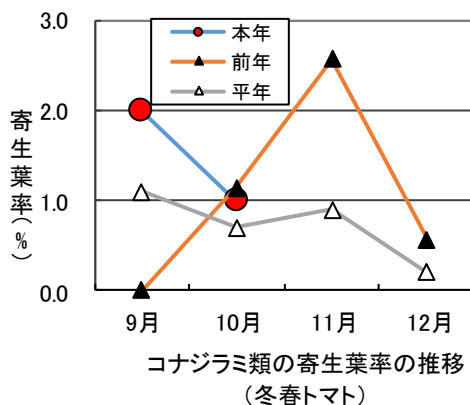
◎冬春果菜類

1) コナジラミ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 10月の巡回調査では、トマトで寄生葉率1.0%（平年0.7%）で平年並、ナスで寄生葉率48.0%（平年37.2%）で平年並の発生であった（±）。

イ 10月に実施したメロン現地ほ場の調査では、寄生葉率20.8%（平年21.9%）で平年並の発生であった（±）。



(3) 対策 ア タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病、トマト黄化病、ウリ類退緑黄化病、スイカ退緑えそ病の病原ウイルスを媒介するので、トマト、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（**3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」**を参照）。

イ 施設内部の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

ウ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、早期発見に努める。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) アザミウマ類

(1) 発生量：並

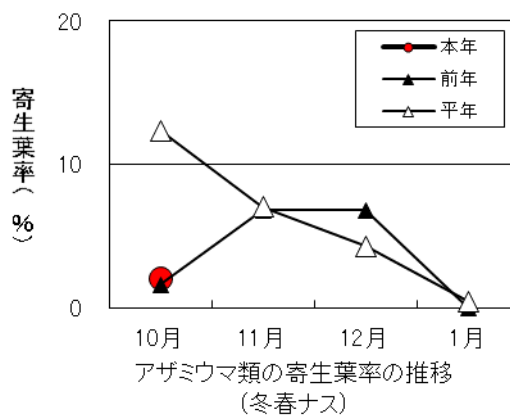
(2) 根拠 ア 10月の巡回調査では、ナスで寄生葉率 2.0% (平年12.4%) で、平年比少の発生であった (-)。

(3) 対策 ア 施設内では、これからの時期も発生が認められる。粘着トラップを設置し、早期発見に努め、発生初期から防除を徹底する。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

イ ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する (**3防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」**を参照)。

ウ 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



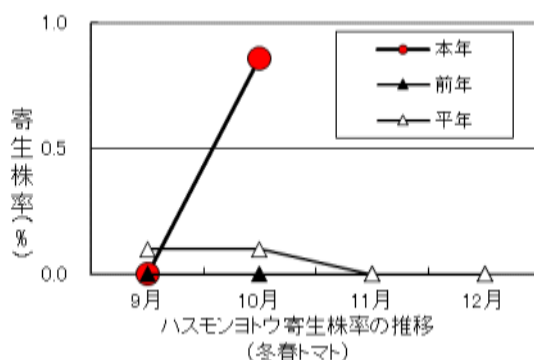
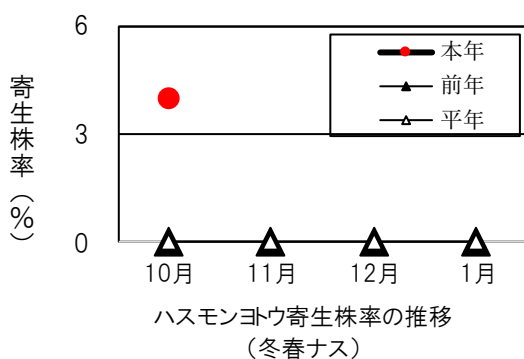
◎野菜類全般

1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 10月の巡回調査では、ナスで寄生株率4.0% (平年0.0%) で平年比多、イチゴで寄生株率2.7% (平年2.7%) で平年並、トマトで寄生株率0.9% (平年0.1%) やや多であった (+)。

イ フェロモントラップによる9月第5半旬~10月第4半旬の誘殺数は、阿蘇市一の宮が849頭 (平年989頭)、合志市が3035頭 (平年2589頭)、八代市が1753頭 (平年1911頭) で平年並であった (±)。山都町が43頭 (平年110頭)、阿蘇市波野が59頭 (平年133頭) で平年比少であった (-)。



(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除を行う。

イ 施設栽培では、ネット上に産卵し、ふ化幼虫が施設内に侵入することもあるので注意する。

ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したらただちに除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



3 防除のポイント等

茶のマシン油乳剤による越冬期防除について

越冬期のマシン油乳剤散布は、チャトゲコナジラミとハダニ類への防除効果が高いため、発生園では対策を徹底しましょう。

- ①越冬期のマシン油散布を11月～2月上旬に行う。
- ②古葉に多く寄生しているため、薬剤散布前に整枝やすそ刈りを行うとともに、すそ葉の葉裏にも薬液が充分にかかるよう、すそ部から茶株頂上部に向けて斜め上方向に散布する。
- ③マシン油散布は赤焼病の発生を助長するので、赤焼病の常発園では散布を控える。

野菜のウイルス病まん延を防止しましょう

本県では「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「スイカ退緑えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病気の原因となる各ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

例年、これからの時期は野外の微小害虫の数は大きく減少します。しかし、温度の高い施設内では冬期でも活発に活動しますので、今後もウイルス病の発生拡大への警戒が必要です。

そこで、以下の対策を必ず行いましょう。

I. 保毒虫を栽培ほ場に「入れない」対策

上記のウイルス病は、微小害虫がいなければ感染拡大しません。これからの時期は、微小害虫の施設内への飛び込みは大きく減少しますが、できる限り施設内に入れないようにしましょう。

- ①サイド開口部は目合い0.4mm（アザミウマ対策の場合は目合い1mm以下）防虫ネット、谷換気部は、目合い1mm以下の防虫ネットで被覆する。また、被覆ビニルや防虫ネットに破損や隙間が無いか点検を行い、必要に応じて補修する。
- ②ハウス周辺に雑草および野良生えが残っていると、微小害虫が飛び込みやすくなるため除去する。

II. 保毒虫を「増やさない」対策

施設内での感染拡大を防ぐため、野外から侵入した微小害虫を増やさないようにしましょう。また、施設内での発病を抑えることで、栽培終了後に保毒虫が野外へ飛び出す危険性を減らしましょう。

- ①ハウス内に粘着トラップを設置し、早期発見に努め、発生初期から防除を徹底する。
- ②冬春トマトでは、野外からのコナジラミ類の飛び込みが無くなる時期（11月）に成虫効果のある薬剤で防除を行う。
- ③発病株は重要な伝染源、雑草は媒介虫の増殖源となるので、見つけ次第直ちに施設外に持ち出し適正に処分する。

トマト黄化葉巻病では、ウイルス病抵抗性品種であってもウイルスを保毒するため、微小害虫の防除を継続して行う。



III 【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
カンキツ	緑かび病 (貯蔵病害)	並	防除員報告では、平年並(±)。 収穫時には、果実表面に傷が付かないよう注意し、収穫当日は選果をしない。また、入庫前は必ず予措を行う。
冬春 トマト	葉かび病	並	巡回調査は、平年並(±)。 除去した病葉は、直ちにほ場の外へ持ち出す。
冬春トマ ト・ナス	灰色かび病	並	巡回調査は、トマト、ナスで平年並(±)。 除去した病葉や果実は、直ちにほ場の外へ持ち出す。
秋メロン	べと病	並	防除員報告は平年比やや多～並(+) 除去した病葉は、直ちにほ場の外へ持ち出す。
野菜類 全般	アブラムシ類	やや多	巡回調査は、イチゴで平年比やや多、トマト、ナスで平年並(+) 黄色水盤の誘殺数は、平年比多(+) 発生を確認したら、直ちに薬剤防除を行う。
【野菜病害虫の共通対策事項】 <ul style="list-style-type: none"> ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める(病害)。 ・多発後は防除が困難になるので、早期に発見し初期防除に努める。 ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。 			

IV その他

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。
また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

◎ 詳しい内容等については 病害虫防除所(生産環境研究所病害虫研究室)
(TEL: 096-248-6490) にお問い合わせ下さい。

※なお、本文及び各種トラップのデータ等はホームページ「<http://www.jpnpn.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「<http://www.jpnpn.ne.jp/kumamoto/>」